

2025.8.31.

「罪の連鎖を絶つ」

旧約 創世記 4章 1～16節

新約 ローマの信徒への手紙 6章 22～23節

1. はじめに

8月最後の主の日ですので、旧約から御言葉を受けます。今日は、創世記の第4章です。ここは、いわゆる「兄弟殺し」と呼ばれる出来事が記されています。

3章において、神様に造られた最初の男と女、アダムとエバはエデンの園におりましたが、神様が食べてはいけないと禁じられた木の実を食べてしまい、エデンの園を追い出されました。これが「失樂園」(パラダイス・ロスト)と呼ばれる出来事です。「失樂園」と言えば渡辺淳一の小説やそれを映画化したものを思い浮かべる方もいるかもしれませんが、こちらが本家です。

このエデンの園を追放されたアダムとエバから生まれたのが長男カインと次男のアベルです。アダムとエバそれにカインとアベル、これが聖書が記す人類最初の家族ということになります。長男のカインは土を耕し作物を得る農耕者となり、次男のアベルは羊を飼う牧畜者となりました。そしてこの四人は仲良く暮らしました。ということならば、日本昔話のようになりそうですが、聖書はそうは告げていません。この人類最初の家族において長男カインが次男のアベルを殺すという、兄弟殺しが起きてしまったと告げます。これは何ともショッキングな出来事です。私どもは家族はみんな仲良く暮らすのが当たり前だと思っておりますけれど、よりによって兄弟殺しとは、何とも陰鬱な思いになってしまいます。聖書は罪の現実を告げます。人間の罪の現実から目を背けようとはしません。神様に対して罪を犯してしまったアダムとエバ。その罪は具体的な兄弟殺しという悲惨な罪の現実を生んだと記します。ここに記されているのは、現代の私どもとは関係ない神話ではありません。私どもが生きている罪の現実です。神様に罪を犯して神様との愛の関係を壊してしまった人間は、地上における人間関係としての愛においても破綻する。そう告げているわけです。

2. カインの末裔

もちろん、私どもは実際に兄弟殺しをするわけではありません。しかし、どの家庭においても様々な問題を抱えていますし、夫婦だってそうです。これが私どもが生きている現実です。更に大きな視点で見れば、ウクライナとロシアは歴史的には兄弟のような関係でしたが、現在は互いに殺し合っています。あるいは、もう35年ほど前になるでしょうか、ユーゴスラビアという国がありました。この国は元々民族・宗教がバラバラな人たちが集まったモザイク国家と言われておりましたが、チトー大統領が亡くなるとそれぞれの民族が独立を宣言し、その結果内線が次々と起きました。それぞれの民族の居住地域は入り組んでおり、互いに重なりあっていたので、この内線・紛争はまことに悲惨なことになるしました。主な内戦だけで「スロベニア紛争(十日間戦争)(1991年)」

「クロアチア紛争（1991 年 ～ 1995 年）」「ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争（ボスニア紛争）（1992 年～1995 年）」「コンゴ紛争（1996 年 - 1999 年）」「マケドニア紛争（2001 年）」と続きました。そして、現在は6つの共和国になっています。そんな遠くの国の話じゃなくても、日本と隣の国の関係だって決して良好とはいえません。難しい現状があります。歴史的には兄弟のような関係の民族や国家が、互いにいがみ合い、果ては戦争にまでおよぶ。それは世界中で繰り返されてきましたし、今も続いています。ここにカインの末裔としての人間の姿があります。では、どうしてそんなことになってしまうのか？家族・家庭にはそれぞれの問題があるでしょうし、それぞれの国や民族との関係も長い歴史の中でそれぞれ独特の問題があるでしょうから、その原因を簡単に整理して、「これが原因です」などと単純化することは出来ません。ここで告げられていることは、その原型とでも言うべきものです。まず聖書が告げていることを聞いてみましょう。

3. 不平等な現実

カインがアベルを殺してしまうという出来事の前に、こういうことがあったと聖書は告げています。3節から見てみますと「**時を経て**（これはカインが農耕者となり、アベルが牧畜者となってから時を経てということです）、**カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった。**」カインは自分が丹精して育てた小麦などを捧げたのでしょう。そして、アベルも同様に子羊を捧げました。ところが、神様はアベルとその捧げ物は目に留められたが、カインとその捧げ物には目を留められなかったというのです。これはどういうことでしょうか？神様は子羊は喜んだけれど、小麦は喜ばなかったということでしょうか？あるいは、アベルは最も良いものを捧げたけれども、カインは収穫されたものの中で一番良いものではないものを捧げたのでしょうか。私どもは神様は公平な方だから、こんなことになるのはきっと何かカインに原因があるはずだと考えようとしめます。しかし、「これこれの故に」と聖書が記していない以上、この原因探しは読み手の想像の域を超えません。そもそも、「**献げ物に目を留められた**」とか「**献げ物には目を留められなかった**」とは、どういう意味なのでしょう。旧約によるこのような表現が意味しているところは、神様の祝福を受けた、祝福を受けなかったということです。そして、更にそれは具体的、現実的な祝福を意味します。つまり、アベルの羊は増えて裕福になったけれど、カインの食物の収穫は不作で貧しくなったということを意味していると考えて良いでしょう。

4. 神様の公平

さて、ここで神様は公平なお方なのではないのかという問題が出てきます。はっきり申し上げますと、聖書は私どもが考えるようなあり方で「神様は公平である」とは言っていません。私どもは同じように何かをしたら、同じように報いを受けるはずだ。それが私どもが考える「神様は公平なお方」ということでしょう。しかし、神様はそんな単純なお方ではありません。それは具体的に考えれば、すぐに分かることです。先日の台風12号では鹿児島県が被災しました。でも、宮崎市は

ほとんど被害を受けませんでした。これは全く公平ではありません。宮崎市の人たちの方が良い人ばかりだった。そんなはずがありません。そもそも、おぎゃーと生まれたときから、私どもは互いにほとんど同じ所が無いような者です。性別、生まれた時代、生まれた国、見た目の容姿、親の経済状態、才能、性格、健康等々、上げればきりがありませんが、全く同じ人なんていません。それが不公平だというならば、神様は実に不公平なお方です。もちろん、神様はすべてをご存知のお方ですから、私どもの目には不公平に見えても、私どもを等しく愛しておられ、私どものためにそれぞれ違った配慮をしてくださり、救いへと導いてくださっていることに間違いはありません。

神様はここで、カインは貧しく、アベルは豊かにという現実を与えました。これは私どもが置かれている日常の現実そのものです。カインとアベルの話は、現代風に言えば、出来の良い弟、あまり出来の良くない兄。そして経済的に弟は豊かになり、兄は貧しくなった。このようなことは、良くあることでしょう。よくあることですが、この格差が大きくなればなるほど、兄弟の関係としては中々面倒なことが起こりやすい状況ではあります。

5. 顔を上げよ

問題は、このような現実を前にして、私どもはどのように歩まなければならないかということです。カインはどうしたのでしょうか？ 5節b「**カインは激しく怒って顔を伏せた。**」と聖書は告げます。カインはこの現実を受け入れることが出来なかったのでしょうか。腹が立ったのでしょうか。カインの気持ちはよく分かります。カインは怠けたわけでもないし、ちゃんと働いた。神様にも捧げ物を捧げた。でも、作物は不作となった。水不足だったのかもしれませんが、天候不良だったのかもしれませんが。ここでカインは激しく怒って顔を伏せました。それは、神様に対して顔を向けることをせず、顔をそむけたということです。カインにしてみれば「自分の何が悪かったというのか。真面目に、一生懸命働いたではないか。神様にも捧げ物を捧げたではないか。それなのに、どうして自分だけこんな目に遭わなければならないのか。弟のアベルの羊は、どんどん増えていく。自分はどんどん貧しくなっていく。自分をこんな目に遭わせる神様なんて要らない。ふざけるな。」カインの思いはそんな感じではなかったかと思います。

神様はそんなカインの心を見抜いてこう言われました。6節「**主はカインに言われた。『どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。』**」と告げました。神様は「**お前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。**」と告げられたわけですが。「顔を上げる」というのは、神様の御前にしっかり立って、神様の御顔を仰ぎ、神様を信頼し、神様に祈る、神様との交わりに生きるということです。神様はカインにここで、「私の前から離れるな」と言われたわけですが。

これはとても重要な論です。聖書の信仰は「いつでも、どんなときでも、神様に向かって顔を上げ続ける」というものです。良いときは感謝し、悪いときは訴え、祝福を願い求める。どんな状況になっても神様の御前から離れない。神様に向かって顔を上げ続ける。それが聖書の信仰です。私の大好きな詩編の一つに詩編13編があります。こういう詩です。

2 いつまで、主よ

わたしを忘れておられるのか。

いつまで、御顔をわたしから隠しておられるのか。

3 いつまで、わたしの魂は思い煩い

日々の嘆きが心を去らないのか。

いつまで、敵はわたしに向かって誇るのか。

4 わたしの神、主よ、顧みてわたしに答え

わたしの目に光を与えてください

死の眠りに就くことのないように

5 敵が勝ったと思うことのないように

わたしを苦しめる者が

動揺するわたしを見て喜ぶことのないように。

6 あなたの慈しみに依り頼みます。

わたしの心は御救いに喜び躍り

主に向かって歌います

「主はわたしに報いてくださった」と。

詩人は四回も繰り返して「いつまで」と神様に問います。多分、この詩編の詩人がとても困難な状況に陥って、何年も過ぎたのでしょう。その間、彼は毎日神様に祈り続けた。しかし、状況は少しも変わらない。それでもこの詩人は神様の御前から離れません。「いつもで」「いつまで」「いつまで」「いつまで」と繰り返し嘆き、祈り、求める。そして、この詩人は最後に「**主はわたしに報いてくださった**」と主に歌うことが出来ました。神様はカインにそのようなご自分との関わりを求められたのです。しかし、その神様の御心はカインには届きませんでした。

6. 治めなければならない妬み心

そして、神様は続けて言われました。「**罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。**」神様は、カインよ、私に対して顔を伏せて歩むならば、罪が待ち伏せていておまえを捕えようとしている。これに捕らえられてはならない。カインよお前はその罪を支配しなければならない。これに支配されてはならない。そうカインに教えたわけです。では、この時カインを待ち伏せていた罪とは何でしょうか。それが「妬み」と一つになった「怒り」です。この時、もし弟のアベルも同じように貧しくなっていたのならば、カインとアベルは協力して、この厳しい時を乗り越えていこうとしたかもしれません。しかし、アベルは豊かになった。この時カインの怒りの矛先は、アベルに向けられてしまいました。アベルはカインに何もしていません。それでもカインはアベルを赦せない。妬みとはそういうものです。そして、カインはアベルを誘い、野原に行き、アベルを殺してしまいました。なんということかと思います。人類最初の家族において、兄弟殺しが起きてしまったのです。聖書は、地上における最も美しい関係であるはずの「家族」に

おいてさえ、このような愛の破れ、愛の破綻というものが起きる。人間の交わりの危うさ、罪の恐ろしさを私どもに教えているのでしょう。

ここで「妬み」と「怒り」が一つになった出来事を私どもは思い起こします。それはイエス様の十字架です。聖書は「**祭司長がイエスを引き渡したのは妬みのためだと分かっていた**」(マルコ 15:10)とはっきり記されています。妬みと怒りが一つとなって「十字架に付けよ、十字架に付けよ」と叫び、イエス様を十字架に架けたのです。神の独り子を十字架に架けて殺すという、最も罪深い出来事は、この妬みによって引き起こされたと聖書は告げます。この妬みと怒りに支配されたとき、私どもはどんなに恐ろしいことだってしまう。だから、これに支配されてはならないのです。これを治めなければならないのです。しかし、私どもにそんな力があるでしょうか。ありません。この罪の暴走を止めることができるお方、それは聖霊なる神様です。私どもの中に聖霊なる神様が宿ってくださり、罪の支配から解放し、神様の支配へと私どもを移してくださらなければ、私どもが罪の奴隷の状態から解放されることはありません。

7. 罪の連鎖を絶つために

ここで私どもは、アダムとエバの神様に対しての罪が、アダムとエバという夫婦の関係も互いに相手のせいにするというあり方で崩れ、更にその子供のカインとベルにおいては兄弟殺しというエスカレートした形になった。更にこれが全人類へと広がり「**地上に人の悪が増し、常に悪いことばかり心に思い計る**」(創世記 6 : 5) ことになり、ついにノアの洪水による神様の裁きへと至ったと聖書は告げるわけです。これは罪というものが、その時だけ、その人だけの心の中のことではなく、それは出来事となり、広がり、いよいよ深刻なものになっていく。そう聖書は告げているわけです。つまり、「罪は連鎖」という現実です。妬みと怒りが一つとなって、兄弟殺しという現実となり、更にそれは憎しみを生み、それは増大し、すべてを飲み込んでいく。心の中の罪が具体的な悲惨な現実を生み出し、更にそれが周りを巻き込み、広がり、とてつもない悲劇へと人間を落としていく。ウクライナ戦争に限りませんが、戦争というものは一度始まると中々止めることが出来ない。それは愛するものが殺され、傷つき、そのことによって憎しみの連鎖反応、怒りの連鎖反応が起きて、それが台風の渦のように人々を巻き込んでいくからです。この連鎖反応を終わらせるには、その根っこにある罪を絶たなければなりません。そうでなければ真の平和はやってきません。イエス様は、この罪の連鎖を絶ちきるためにやってこられました。

ウクライナ戦争もやがては終結するでしょう。一日も早くそうなってほしいと願います。しかし、それによって罪の連鎖が絶たれるわけではありません。憎しみと怒りは、ずっと人々の心の中から消えることはないでしょう。皆さんは、ウクライナ戦争が停戦となって、ウクライナの人たちとロシアの人たちが互いに笑顔で抱擁する姿を思い浮かべることが出来るでしょうか。これは中々想像することさえ難しいです。しかし、私は必ずそのような時が来ると信じています。それは、イエス様が来られ、愛すること、赦すことを教えてくださり、聖霊なる神様が主の平和を与えてくださるお方として、私ども一人一人に働いてくださるからです。真の平和は聖霊なる神様によって、聖霊

なる神様によってだけ与えられます。

8. カインのしるし

神様はアベルを殺したカインに対して、11、12節「今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」と告げられました。神様はカインを裁かれたわけですが、これに対してカインは13、14節「わたしの罪は重すぎて負いきれません。今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となってしまうと、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」と答えます。カインのしたことは、とんでもない恐ろしいことです。カインもそれが分かりました。自分の罪は重すぎて負いきれない。そう告白します。それにこの地から追放されれば、地上をさすらう者となるしかありません。しかも、神様が御顔を隠されるならば、自分には何の守りもなく、自分はよその地で出会う人に殺されるしかありません。そう神様に告げるわけです。そうすると神様は、カインにこう告げられました。「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」神様は、この地を去るカインを決して見捨てない、そのことを示すために「しるし」をカインに付けました。カインを殺す者は7倍の復讐を受ける、私が復讐する。だから安心して行きなさいとカインに告げたわけです。この「しるし」がどんなものだったのかは分かりません。ただはっきりしていることは、弟アベルを殺したカインを神様は見捨てはしなかったということです。守りの御手の中に置いてくださったということです。この御手は私どもの上にも伸ばされていますし、カインにつけられた「しるし」のように、私どもにはイエス様の十字架のしるしが付けられているわけです。私どもがカインのような罪を犯した者であったとしても、これは私のもの、私の子、永遠の命を与えられし者、ということが神様から見ればはっきり分かる「しるし」が私どもには付けられている。そのことを心から感謝しつつ、決して妬み心に支配されることなく、聖霊なる神様を心に宿しつつ、この一週も御国に向かって歩んで参りたいと心から願うのであります。

お祈りします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、カインの兄弟殺しの御言葉を通して、私どもカインの末裔であることを知らされました。しかし、そのような私どものためにイエス様は来てくださり、その尊い血潮をもって私どもを神様のものとしてくださいました。カインに「しるし」が付けられたように、私どもにも神様の子・僕としてのしるしが付けられています。どうか、私どもが妬みや憎しみや怒りに支配されることなく、あなた様の愛を現す者として歩んでいくことが出来ますように、聖霊なる神様の導きを心から願います。どうか、この世界に主の平和を満たしていってください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン